

オーム社開発部における T_EX の利用

森田尚・鹿野桂一郎・高尾智絵（オーム社 開発部）

hmorita@ohmsha.co.jp, kshikano@ohmsha.co.jp, ctakao@ohmsha.co.jp

<http://www.ohmsha.co.jp/>

2010-10-23

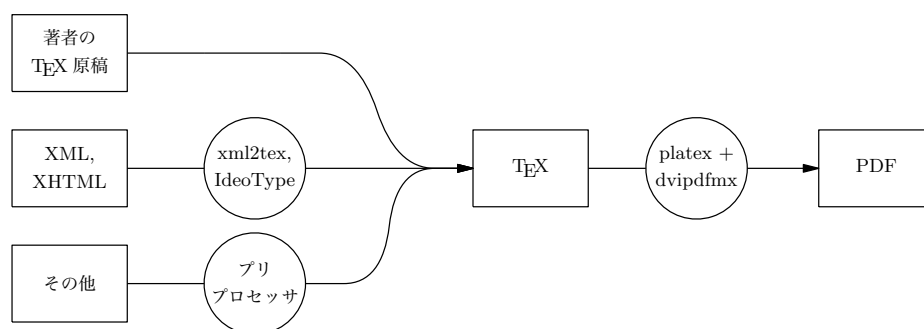
概要

当編集部で企画編集し、T_EX (L^AT_EX) を利用して組版された出版物をご紹介します（展示物参照）。T_EX 導入以前は、組み直しが大変なので、内容上・レイアウト上の試行錯誤が十分にできないという問題がありました。T_EX を導入した結果、原稿が組版された状態で何度も書き直せるようになり、著者の実力を発揮してもらいやすくなりました。

ワークフロー

現在では、執筆から編集制作までを次のようなワークフローで行っています。

1. 原稿一式をサーバ上のバージョン管理システムに登録しておく
2. 著者や関係者が、メーリングリストなどで議論をしつつ、原稿を編集する
3. 原稿が更新されるとサーバがそれを検知して、自動的に組版し、所定の場所に PDF をアップロードする (XML 形式や Wiki 記法で記述された原稿は、前処理スクリプトが T_EX に変換する)
4. 著者陣は PDF をプレビューして原稿をさらに編集する (2 へ戻って繰り返す)



利用している主な技術

- pL^AT_EX2e, DVIPDFMx, jsbook.cls (12.5Q オプションを追加)、その他マクロパッケージ多数
- xml2tex.scm, IdeoType (プリプロセッサ)
- その他: Subversion, Git, Darcs (バージョン管理)、Trac (プロジェクト管理)、Hudson (自動ビルド)、Debian GNU/Linux (開発・運用全般のプラットフォーム)、Adobe Acrobat (PDF/X-1a への変換)

制作基盤は過半がオープンソースソフトウェアで構成されています。開発者・メンテナの方々に感謝します。

今後

今後も引き続き、本文記述・スタイル定義・ビルド環境整備などさまざまな面で、T_EX を利用する際のベストプラクティスを模索し、学んでいきたいと考えています。